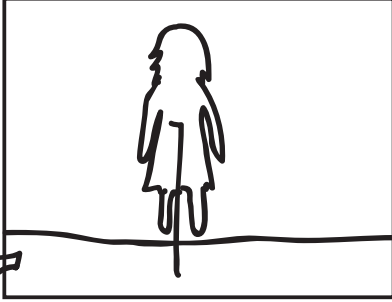


●タイトル

パンをふんだ娘  
インゲル

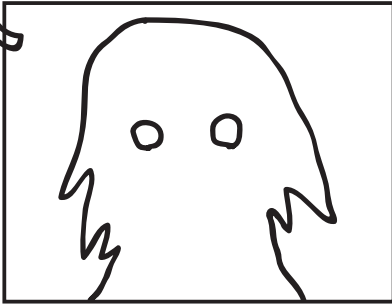
タイトル

●一場 悪童

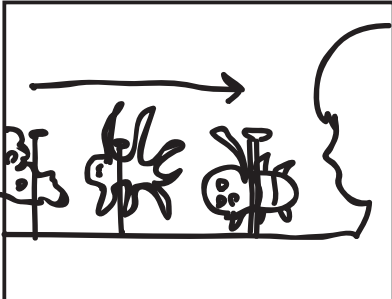


インゲル全身からアップへ  
「私はインゲル。私は貧しい家の子でした。高慢でみえぼうでした。私にはもともと悪い性質があったということです。」

●一場 悪童



●一場 悪童

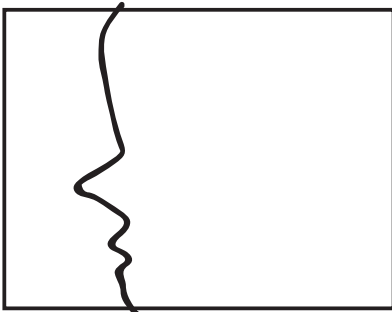


インゲルの横顔。ピンに刺さった虫が流れてくる。  
「ごく小さいときにも虫をつかまえると羽をむしりとははいまわらせて遊び、一匹ずつピンに刺して…。」  
「ほら●●●●がのうちまわっているわよ。  
ほら●●●●が身悶えているわよ。  
ほら●●●●がからだをひくひくさせているわよ。  
………… (いくらでも繰り返し)

(●●●●は虫の名前・架空の虫を考える)

クッククックク。クッククックク。」

●一場 悪童



インゲルの横顔が大きくなり、そのまま暗く  
「私は、インゲル。」

●二場 パン



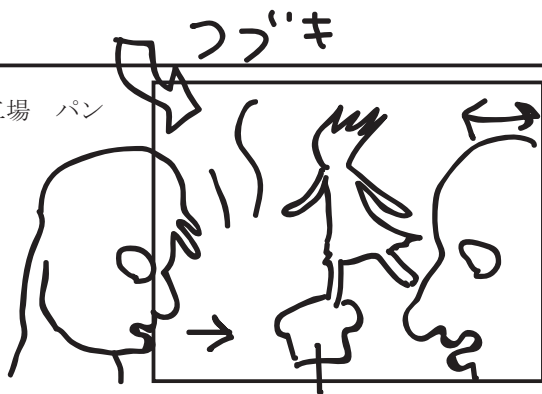
「大きくなるにつれて私はますますわるくなるばかりでした。けれども美しい娘になりました。それが私にとっては、かえって不幸だったのです。」

パンをふんだインゲル。水中にあるような効果を考える(水槽を通して泡をみせるなど)。両脇を水の中の生き物(藻、微生物など?)が上へと通りすぎていく。(「パンをふんだ娘、パンをふんだ娘…」と繰り返す歌声)

「私は上品な家庭に奉公に行きました。ご主人夫婦は私を自分の子のように、かわいがり身なりもよくしてくてました。私は美しくなりましたが、高慢な心もいっそうつりました。」

次の  
ページへ

●二場 パン



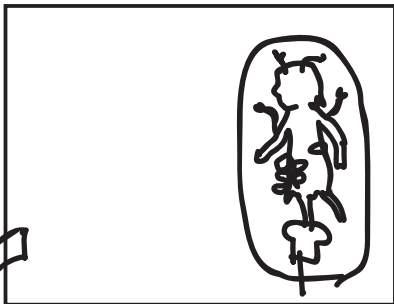
左右から順番に大きな顔

ご主人「インゲルや、一日ひまをあげるから年とったお母さんに会っておいで。それからこのパンをおみやげに持っておいで。」

お母さん「おまえは、小さいときよくわたしの前かけをふみつけたけれど、大きくなったら、わたしの心をふみつけはしないかと、それが心配だよ。」

「私はパンをどろの中に投げ入れました。そのパンの上をふんで、くつをぬらさないで渡ろうと思ったからです。片足をパンの上ののせて、もう一方の足をあげたときに、パンが私と一緒に沈みはじめました。どこまでも、深く深く深く深く……（繰り返し）。」

●三場 地獄



パンをふんだ娘。体中に蛇、蛙、虫がくっついている。

「私が沈んでいったのは沼女の酒つくり場でした。そこにくらべたら下水だめさえ明るい御殿といってもいいほど。酒つくり場を見学に来た悪魔のおばあさんが私に気がついて、よく見なおしました。」

悪魔のおばあさん「こりゃ、素質のありそうな娘じゃな。」「記念にもらってかえりたいね。わたしの孫の子の家の廊下に立てる立像に、もってこいじゃて。」

「おばあさんは私をもらいうけ、私は地獄へ行くことになりました。」

●三場 地獄



奇怪な姿をした地獄の亡者が並んでいる。

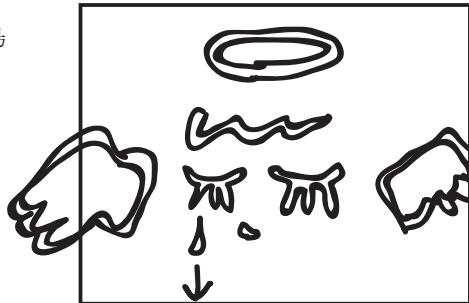
「地獄の廊下はどこまでもはてしなくつづき、異形の姿になった亡者たちがならんでいました。」

亡者の一人とインゲル場所入れ替え

けちんぼう「私はけちんぼう。私は金庫の鍵を忘れてきたのです。しかも、それが金庫にさしっぱなしになっていることを知っているのです。それが私の心の苦しみです。（地獄の亡者のエピソード・いくらでも繰り返し）」

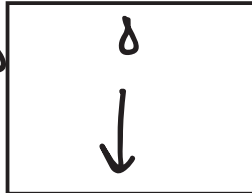
「あれだけのことで、こんなに苦しまなければならないのかしら。他の人だって自分たちのしたことで罰せられるのが本当だわ。ああ、なんという苦しみだこと。」

●四場 鳥

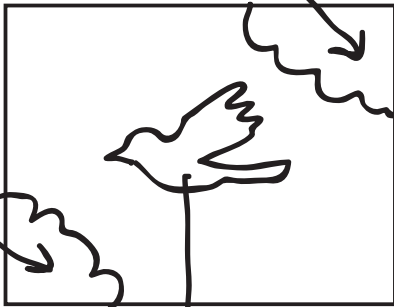


天使。涙がこぼれおちる。（涙はライトで表現する。）

天使「かわいそうなインゲル、かわいそうなインゲル…（繰り返し）」（天使の声にはエコーをかける）



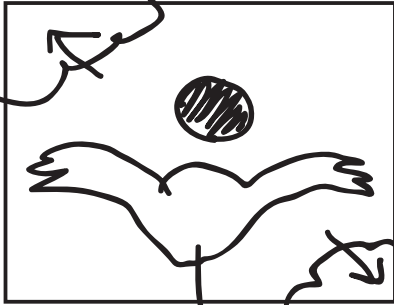
●四場 鳥



鳥が飛んでいる。雲が流れる。

「神さまの天使の一人が、私のために流した涙とお祈りに、私の心は打ち砕かれました。一すじの光がさし、私の石のようになっていたからだは消えてしまいました。同時に一羽の小鳥が人間の世界に向かって飛んでいきました。小鳥は冬の間じゅう、たくさんのパンくずを集めて他の鳥たちにかけてやりました。そのパンくずは積みもりつもって私がふんだパンと同じくらいになりました。そのとたんに、翼が真っ白になって大きく広がりました。」

●四場 鳥



「鳥は太陽の光の中のにぼって行きました。人々の話ではまっすぐ太陽の中に飛んでいったということです。」

